



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、㈱日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『成「幸」学』（講談社）、「あなたの人格以上は売れない!」（プレジデント社）、「出過ぎる杭は打ちにくい!」（サンマーク出版）、「面白くなくちゃ人生じゃない」（ロングセラーズ）、「リセット人生・再起動マニュアル」（ワニブックス）、「小説・球磨川」（上下巻・ワニブックス）などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.3percent-club.com

21世紀だ！——人生・農業リセット再出発 117

真相は藪の中、はたまた海の底か——

「なかなか話が面白いねえ」。私の大阪講演後にトイレで声をかけてきたのは、近畿日本鉄道の社長だった。伊勢神宮に寄るついでに、近鉄が経営する「志摩スペイン村」にも足を伸ばしてみたいと話すと、だったらあなたは大王崎の「思案地蔵」に興味が湧くと思うよ……となった。

伊勢湾と太平洋を分けるように突き出す志摩半島。その南端にある英虞湾は長い半島に抱かれた内海で、常にベタ凧の美しい海原が広がる。ところが湾の外側に位置する大王町波切の大王崎灯台に足を運ぶと、そこは別世界。白く砕ける波頭の荒波が眼下の断崖に打ち寄せる。“伊勢の神崎、国崎の鐘、波切大王がなけりゃよい”と、船乗りに恐れられ、ほかで座礁したら恥ずかしいが、波切なら仕方がないとされたほどの難所である。

全国から江戸に集められる年貢米や消費財は、陸上輸送よりも大量に安価で運べる海運が使われた。山形の出羽米ですら、陸路ではなく日本海を西へ航行し、下関から瀬戸内海に回って、大坂経由で大王崎を目指す。そこから遠州灘を抜けて江戸にたどり着くコースであった。ただ当時は、海上から沿岸の形状や山を観察しながら自分の位置を推測する“地乗り航法”であり、風任せでしか帆船は動かせなかった。伊勢志摩から伊豆下田までの航路は富士山しか目印がなく、安全な天候が回復するまでの“日和待ち”として、天然の良港がある伊勢志摩は重要な存在であった。

ただ、岬の突端にある波切は地形的に良港がなく、人口1500人ほどの貧しい漁村集落だった。1830年、そこで475人もの村人が罰せられ、14人が江戸送りで処刑される大騒動が起きた。伊予

から江戸へ御用米を届ける船が難破し、船頭と水夫たちが波切に漂着した。沈没の危険が迫れば積荷を海に捨てても罪に問われない“荷打ち”の掟があったが、重要な幕府米であったため海事裁判が開かれた。漁民の立ち会い証言のもと、あの状況では荷打ちは正当であったという浦証文が発行され、一件落着になった。ところがある夜、番所役人の為八郎が、村人に取り囲まれて棍棒で殴り殺されたのである。後の「天保記」によれば、為八郎はある情報を入手、それをネタに次々と村人をゆすり、たまりかねた村人が暗闇で盗っ人に間違えたことにして抹殺したとある。実は伊予船の遭難は偽装難破であり、御用米を堺などの寄港地で売りさばいて荒稼ぎし、残ったコメを波切の漁民に口裏合わせとして分け与えたのだという。

難破の名所では、遭難のたびに救助に駆り出される地元漁民にすれば、沈みかかった積荷は暗黙の報酬ともいえる。問題なのは村人が偽装工作に手を貸し、幕府の役人を口封じのために惨殺したことである。ただの座礁事故と、泥棒と誤認した過失傷害致死だったという説もある。ただ、これほどの刑死者が出たのは、それまでもに疑わしい事故が相次いでいて、御用米を食い物する輩に対する幕府権威の見せしめだったのかもしれない。

波切の高台に建つ薬師堂には、14名の戒名が刻まれた台座に思案地蔵様が座っていた。右手で頼杖をつき、さてさてことの真相は？と、大きく首をかしげていた。近鉄の社長は何ゆえ私にここを勧めたのか、今度はこちらが思案する番であった。「どんなものでも自然という造物主の手から出る時は善であり、人間の手に渡ってからは悪となる」——J.J.ルソー『エミール』より。